

泌 尿 器 科 紀 要

第 18 卷 第 6 号

1972年6月

随 想

抗 菌 性 抗 生 物 質

白 羽 弥 右 衛 門*

私が京都大学医学部に入学したのは1933（昭和8）年春のことであったから、はや、かれこれ40年前のことになる。そのころの解剖学教室には、すでに故人となられた小川睦之助、木原卓三郎両教授のほか、今日80才をこえてなおかくしゃくとして活動しておられる舟岡省吾教授の3先生が系統解剖学を講じておられた。舟岡先生からは、さらに組織学総論を学んだが、先生の理路整然とした講義は、そのはりのある口調とともに、私にとってはまことに魅力的であった。この講義のなかで、はじめて「化学療法」ということばを覚えた。そのご臨床医学の講義をきくようになったころには、鳥潟隆三先生が停年をまぢかにひかえて、先生の life work となった Impedin-Koktoimmunogen の研究を集大成しておられたときでもあったためか、感染症の原因療法の一つである免疫療法のお話がしばしば講義のなかに出てきたので、免疫療法が外科領域の感染性疾患はもちろん、外科手術ことに当時の食道癌切除手術の成果にまで深いかかわりのあることを認識させられた。医学部卒業のあと臨床医学を学ぶならば、外科にはいたいとの私の気持がいつのまにかかたまっていった過程のなかで、講義をきいた先生がたの影響がきわめて大きかったことを想起する。それにつけても、こんにち大学で教育に当る立場にあるものが後代にあたえる影響ひいては責任のきわめて重大なことを、いまさらのごとく痛感するしだいである。1937（昭12）年春京大病院外科の医局にはいったころ病棟の患者の大部分は感染症の病人で、悪性腫瘍はまだごくろうりょうたるものであった。今日ではみることのすくなくなつた急性多発性化膿性筋炎、急・慢性骨髄・骨膜炎、急・慢性膿胸、「よう」や蜂カ織炎といった感染症例が若い医局員の受持になり、手術はといえば、排膿を主とした観血処置がおもであり、無菌手術といえば鼠径ヘルニアの修復、虫垂切除、まれに胃切除などがおこなわれていたのみである。感染症の化学療法剤としては、バイエルから出された赤色プロントジールがようやく試みられかけたころであり、2基のサルファ剤が創製されたときでもあった。在局1年たらずして、日支事変のために隊付軍医として応召・出征した私は、それでもその後の国内文献などによってサルファ剤開発の経過をはるかに聞きおよんでい

* 大阪市立大学医学部教授（外科学）

た。1942（昭17）年秋帰学，昭和19年2月から25カ月間福井赤十字病院外科に勤務していたころ，当時の陸軍軍医学校のなかにつくられた碧素委員会に出ておられた恩師青柳安誠先生が上京の途次立ちよられ，お話のあったことから，はじめてペニシリンを知るに至った。1946（昭21）年3月帰学してみると，大学院学生の本郷引之博士が青かびを自ら培養してその露滴をあつめ，ほそぼそとした実験をひとり熱心につづけておられたが，ペニシリンを足がかりとした化学療法の研究は，私にとってまことに興味あるものであったので，青柳先生のお許しをえて，私もペニシリンの外科領域における応用について系統的な研究をはじめたようになった。それ以来，相ついであらわれる各種抗生物質の臨床研究から離れられなくなったまま今日に至ったわけである。はじめにつくられた抗生物質学術協議会から発展的に日本化学療法学会が設立されていらい，本年はちょうど20周年に当たるといふことで，たまたま第20回化学療法学会総会が大阪市内（会長塩田憲三教授）で開催される機会に，記念行事が催されることになっている。

しかし，はじめには感染症の治療が抗生物質によってきわめて容易におこなわれるようになり，その偉力が評価されて，はなばなしい存在であった化学療法も，重症感染症の激滅にともなうて，こんにちでは必ずしも若くて意欲的な研究者をひきつける存在ではなくなりつつあるのではないかとすら思われる。しかも，その後もあいついで開発されつつある新抗生物質については純化学的な方法で，component が分離され，生体内における代謝過程も徹底的に追求されて，抗菌作用や副作用の機構があきらかになりつつあるのみならず，在来の抗生物質の各種誘導体も開発されて，抗菌力のうえで新生面を展開するようになった。それだけの研究の深化には専門の知識・方法を身につけた真摯な研究者が必要である。したがって平面的な臨床外科医の立場からこんにちの化学療法研究にかかわることはしだいにむずかしくなってきた。ただ現象的にのみこれに関与するにすぎないとの深刻な反省と疎外となやみを覚えざるをえなくなったのが私どものこんにちである。あえて研究といわずどんな社会現象においても，創建開発の時期には未解決の問題が多く，それへのとりくみはきわめて興味ぶかい。しかし，いちおう基本的な解決が見いだされ，標準化が達成されたのちにおける再開発こそあらたな困難を包蔵し，精緻化された方法を駆使する研究努力を要請するものである。私どもの抗生物質研究も，4分の半世紀を経過して，このまがりかどに逢着したようである。